

特別寄稿

我が国における地域リハビリテーションの
実践先駆者—山本和儀先生を偲ぶ古井 透¹⁾、伊藤 晴人²⁾、野村 典子²⁾

1 一貫して人生を駆け抜けた山本和儀教授

2007年11月18日大阪河崎リハビリテーション大学教授山本和儀先生が亡くなった。享年69歳であった。大変懇意にされていた医療法人若弘会 若弘会病院（大阪市浪速区）で最愛のご家族に見守られてのことであった。

実はこの入院自体きわめて短いもので、必要最小限の関係者にしか告げておられなかった。これは「生涯現役」を強く望んだ山本教授の生き方そのものようでもあり、またご家族を思う山本教授流の「優しい気配り」でもあったのではないだろうか。何しろ、入院直前の日曜日にも京阪ライフサポートでの講演をされていたと聞く。歯を食いしばり、最後の最後まで公人であり続け、ついに、予定されていた手術入院を3日ほど早め、ご自分から「入院する」とおっしゃったと聞いている。公務・講演に大変ご多忙な日々が続いていて、入院してやっと家族のもとへ帰ってこられたのだ。だから「せめてこの時間だけは水入らずで」という山本教授の「優しい気配り」と考えるのはあながち的外ではないだろう。筆者は、これほど鮮烈で優しい逝きかたをみたことがない。教授のご逝去には「急逝」という言葉だけではとうてい言い尽くせない深いものがある。

山本教授をここまで突き動かしたエネルギーは何だったのか？ 関わった多くの人々を支えきろうとして、またご自身もそのようにして貫き通された生き様とはどのようなものなのか、いまここで振り返っておきたいと思う。

2 出会いは鮮烈

山本和儀先生はとても出会いを大切にされる方だった。初対面であろうと、どんなに無名であろうと、どんなに新人であろうと、出会ったら必ずといっていいほど差別なく、とにかくすぐに握手をされる。とにかく、のっけからfriendlyなのである。そして一緒に写真に写るのがお好きで、常にカメラを持ち歩いておられ（最近では「ケイタイ」という文明の利器さえも巧みに使いこなしておられ）、それを機会あるごとに相手に送るなどして、「出会い」を「付き合い」に発展させることの達人であった。筆者が熊野町役場入職直後、広島県の主催で開かれた講演会の後、役場仲間と広島名物お好み

1) 大阪河崎リハビリテーション大学

2) 大東市健康福祉部健康いきがい課

焼きをご一緒させていただいたのが最初の出会いである。「リハビリは専門職におまかせ」という風潮が当時からもあって、筆者は常々これに抵抗を感じていたので、先生の講演の質疑応答で、セラピストの地域福祉における役割について「病院でやっているようなりハビリテーションを地域で行うのではなく地域そのものをリハビリテーションする（たてなおす）点にもあると思うが？」と質問に立った。そのときのお答えがやや総論的に感じられ具体的アドバイスがほしいと思い、失礼を承知で講演の後で出口に向かわれる先生にお声をかけさせていただいた。すると筆者に「お前はPTか、OTか？」と逆に質問され、「どっかうまいもん食べられるところへ行こう。そこの二人（事務職の同僚）も一緒にどうや？」という展開になった。「偉い先生」なのにとっても敷居が低いのである。だからこそ、そのネットワークたるや日本全国津々浦々にはりめぐらせることができたのであろう。

人の人生には多くの人との出会いがあるといわれる。たとえば毎日新しい人10人に会おうとしても単純に計算すると10人×365日×70年＝約25万人の人と会おうことになる。この数字が大きいか小さいか？ ひるがえって、世界の人口は約66億4千万人だから、われわれが一生かかかっても、世界の中のごく僅かの人にしか会おうことができない。その確率はなんと2万6千560分の1という天文学的数字になる。つまり、一生かかかって25万人の人と出会ったとしても、所詮それは世界のごく限られた2万6千560分の1でしかないわけであり、今、この瞬間に、われわれが誰かと会おうということは、それ自体がこの世の奇跡ともいえる出来事なのである。山本和儀先生はそんな計算をされたことがあるのか、ないのか仔細は不明だが、その深い洞察力から一目瞭然に、人の出会いの奇跡を常に意識しておられた。とても人を大切にされ、その人との出会いを大切にされ、その真摯な態度は生涯変わることなく貫き通された先生の生き方のひとつの大きな特徴であった。

先生と多少とも付き合いのある人間なら誰でも知っていることだが、先生は人に頼まれると断ることが極めて少ない。たいていの場合、スケジュールが多少タイトでも、場合によっては謝礼等に関係なく、志や「やる気」、ニーズがあれば自分から相手を選ぶということは全くなかった。来るものは拒まず、去る者は追わず、そして出会いは一期一会、そんなことばがびったりあてはまるような人づきあいをされていたように感じる。それゆえ、山本教授の最近の著作には、公立みつぎ総合病院 山口昇先生、兵庫リハビリテーションセンター 澤村誠志先生、若弘会 河合秀治先生、慶応大学 浅野史郎先生、茨城県立医療大学 大田仁史先生、国際医療大学 竹内孝仁先生など日本の地域医療・高齢者医療福祉を凌明期から牽引してきた人達までもが言葉を寄せている。もっとも、これらの人たちの多くは1971年に生まれた全国地域リハビリテーション研究会の立ち上げの時から永いつきあいの、いわば地域リハビリテーション活動の同志だが……。

3 統合教育と地域リハビリテーション

成書^{1) 2) 3)}に詳しく山本教授ご自身が書かれているので、詳しくはそちらを精読していただくとして、ここでは概略のみにとどめておくが、大東市の地域リハビリテーションが他に類を見ないほど特徴的なことは、山本教授の言によれば「地域における子どもたちのノーマライゼーションから始まった」ことであろう。それは「障害のある子供が地域で生きていくために必要なものはもの」として明確に「訓練によって障害を“治す”ことや“克服する”ことではない、地域の子供たちとともに成長し、友達をたくさんつくること」を目指したことに集約され、当時としても、そして今でも、きわめて画期的なのである。

山本教授がなぜ、このような境地に立つことができたのか、著書「山本和義の地域リハ」¹⁾で赤裸々に語っておられる。かいつまんでいうと、1960年物療師として大阪赤十字病院で働きつつ理学療法士免許を取得し、1967年「大阪府立大手前整肢学園」の医務部長から請われて転職しそこで「子供たちとの出会い」が始まったという。そこで子供たちと真剣に向き合う日々のなかで、しだいに「なんで俺、家にかえられへんの?」「家の近くに、こんな施設があったら家からかよえるのに」「ここを出たらやっぱり養護学校いくしかないのかな」という子どもたちの「胸に突き刺さるような言葉」に「焦燥感がつのはじめました。」と回想されている¹⁾。そして、「大東市にも療育の場を作りたい。理学療法士にも来てもらいたい」という親たちの切実な思いに共感し、1973年に大東市単独施設である大東市療育センターの所長としてむかえられることになる¹⁾。無認可施設ではあるが、いやむしろ、だからこそ「医学的支援については、大阪府身体障害者福祉センター付属病院の医師を中心に、地域の整形外科医との協力体制がとられました」¹⁾。著書ではさらっと書き流してあるが、これは今でもなかなか大変な連携体制であろうと思う。「箱物」からスタートせずに、ネットワークの力で前へ進む山本教授のスタイルは、今も（いや、このような時代だからこそ）学ぶべき点が多い。療育センターは養護学級を設置している校区の学校に隣接して建てられた。午前中は療育センター、午後は学校へ「出張」訓練を日常業務にするためには、今だに厳然と強力な「市部局」「教育委員会部局」という行政の縦割り思考と相当のバトルが続いたであろうことは想像に難くない。その、前人未踏で、いまだに稀有なことを当初から貫き通されたのである。このあとも、校区の中学校や知的障害児の受け入れ、ひとつの小学校からすべての小中学校・保育所へと活動の場を広げていかれる。そのつど抵抗にあい、そのたびに常に先生の「心意気に感じ」「俺が責任を持って受け止める」と言ってくれるような人たちとの出会いがあり、それが力強いネットワークになって地域リハビリテーション活動がすすんでいった。「人間力」とでもいえようか。そして、1979年4月26日には日本で唯一の障害児の教育保障を明文化した、「大東市「障害」児教育基本方針」を大東市教育委員会が決定した。おりしも「養護学校義務化」が国のレベルで実施された、まさにその年である。これ以降も「障害児も健常児とともに生活し成長するのがあたりまえ」という理念を実践で示し続けていくのである。国連の障害者権利条約ができる20年近く前に、日本の大東市に現実に起こっていた世界の現代史上特記すべき歴史的事実といえよう。

4 理学療法課

日本の行政機関で、あとにも先にも「理学療法」を冠した部署名はこの大東市の理学療法課以外にはないのではないかと。前述の著書「山本和義の地域リハ」¹⁾によれば、そもそも1978年に相談を持ちかけられた「老人憩いの家」を開設への協力から、高齢者を対象とした組織的関わりが始まったそうである。それまで障害児療育を皮切りに障害児者への支援が中心だったのだから、普通だったらこれは大英断になると思われるが、実にあっけらかんと語られているのである。ついに、乳幼児から高齢者まで、すべてのライフサイクルを対象とした地域リハビリテーションの姿が形成されていった。1983年に施行された老人保健法では、大東市では10年前から実践されてきた訪問活動に対して制度的裏づけがなされた形になった。そして、ついに1985年7月に「理学療法課」が設置された。機を同じくして、地域組織や地域活動が充実していき、大東市での地域リハビリテーション活動浸透の時期であったとされている。

5 影響を受けた多くの人たち

「ねたきりゼロ作戦」で有名な公立みつぎ総合病院 山口昇先生は山本教授との出会いが「厚生省自立度判定基準」策定委員会だったと回想されている。現在の介護保険制度下ではひとつの共通言語にまでなっている「自立度判定基準」は当初「ねたきり判定基準」ともよばれていたがそのネガティブな表現を「自立」というポジティブなものに変えていくベクトルに山本教授の存在は強く影響を与えたに違いないと筆者は勝手に想像している。山本教授は国の制度・施策を真剣に考える人たち大変な影響力のある人であった。衆議院でも招かれてプレゼンテーションされたことがある。決して饒舌ではないがどこか深い「山本節」の愛好者は津々浦々とても多く、つい最近まで「山本和儀 勉強会」が東京方面で定期的に行われていたと聞いている。かたや、山本教授自身「わしは学生のとき勉強せんかったから」といわれ、また「この年になると、勉強が楽しくてしかたがない」ともいわれていた。それだけに後身のことはとても大切にされていたと痛感させられることが多かった。そのような「後身を思う心」ゆえ、理学療法士養成校でもはやくから教鞭をとっておられ、山本教授の著書「支えきること」の巻末で「愛弟子」「仲間」として名前を挙げておられる方々以外にも、本学関連施設である水間病院理学療法室長 沖田幸治先生はじめ現在のPT界を支える多くの優秀な後身が輩出された学びの場に関わってこられた。

山本教授の人とのかかわり方には、一般人にとって認識はあるが行動変容につながりにくいような領域に、誰もが見習うべき点があるように思う。山本教授は「勉強のできない奴ほど愛おしい」とよく語っておられたが、そのあと必ず「わしが勉強あかんかったから、そういう奴の気持ちがわかるんや」と続けることを忘れなかった。見下げないのである。

そして、こうした山本教授の「こころ」は、不思議と対象者に通じてしまう。一般からはどんなに「問題視」されているような人でも山本教授のまえでは妙に素直になる。

そればかりか、山本教授は、最近までも西成区のホームレスと言われる人たちの生活課題にも関わっていたと聞いている。それもうなずけるのである。筆者が日曜日に電話したときに、「今、西成の解放会館で面談中やから、後にして」と言われたことがあったが、あの時もホームレス問題に関わり動いておられたのだろう。

貧困は障害を生み、障害は貧困を生む。就労困難のそのまた先の貧困にも取り組まれていたのである。

多弁ではないが説得力があり、本当に守備範囲のひろい、懐の深い人であった。天国でも多くの魂にかこまれて忙しく過ごしておられるのであろうか、そして、お父上と再会されて生前伝えきれなかった想いを伝えられたであらうか……。

【文献】

- 1) 山本和儀 「山本和儀の地域リハ」2005 年友企画, 東京.
- 2) 山本和儀 「支えきること—自立を支える専門職のために」2007 年友企画, 東京.
- 3) 山本和儀 「ともに学び、ともに生きる」1995 朱鷺